©神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

神奈川文芸賞［2024］

小説部門：大賞

ターンオーバー／見坂卓郎

イラスト／小川ゆいり（県立相模原弥栄高校美術部１年）

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。
入賞作品は順次掲載します。　次回は10日の予定

兄が部屋から出なくなって二年が過ぎた。

妹である私にとって、それはたとえば食卓を囲むときにぽつんと残されたイスや、洗面所のコップと歯ブラシ、玄関の隅に置かれたスニーカー、そういったいくつものヒントを見つけながらようやく実感できたことだった。足し算より引き算のほうがむずかしい。それを私は兄の不在から教わった。

母が運んでくる食事は、いつの間にか空になっている。回数は少ないがトイレに行った形跡もある。だから兄はまだ生きている。そっとドアに耳を近づけてみると、たしかに中から物音が聞こえる。イスをひく音、フローリングを歩く音、カチャカチャという機械音。耳だけが兄らしきものを捉えている。何かをしているのは分かるけれど、何をしているのか分からない。そうやってドア越しに兄の生存を確かめるうち、いつしかドアそのものが兄であるような気持ちになっていた。

あるとき、兄の顔をまったく思い出せないことに気がついた。家族の顔を忘れてしまえるなんて思わなかった。頭に残っているのはもう雲のようにぼんやりとした余韻でしかない。無理やりパーツを当てはめてみると、それはクラスの男子や、あるいは芸能人の誰かをごちゃまぜにした架空の人物になった。兄でないことだけがはっきりと分かった。

私の中にはもう兄が残っていない。それが急に怖くなって母に泣きついた。母は引き出しからアルバムを取り出して「これがお兄ちゃん」とおだやかな口調で告げた。そこにはたしかに兄がいた。私の作り上げた〝まがいもの〟とは似ても似つかなかった。そのことはかえって私を不安にした。写真の中で笑っている兄も、どうせ今の兄ではない。ドアであり続ける兄が、この瞬間にどんな姿で生きているかを知るすべはないのだった。

兄は中学受験で失敗した。それが最後のひと押しになったのは間違いない。けれど、異変はもっと前から始まっていた。親の期待を背負い込んだ兄はがんばって、がんばりすぎた。ストレスのせいか、受験日が近づくにつれて兄の顔から一枚ずつ笑顔がはぎ取られ、いつしか能面のようになっていた。家族はそんな兄をただ遠くから見守るだけだった。そして、不合格の日を境に兄はドアの向こう側へ行ってしまった。

兄なしで過ごした二年間で、私は小学六年生になった。両親は私に中学受験を勧めることはしなかった。それは私の学力が足りないせいでもあったが、兄と同じ道をたどらせたくないという意図もあったのだと思う。

兄の合格、不合格によって道が二つに分けられ、敗者である私たちは不合格の道を歩かされている。それは兄のせいではなく、受験のせいだ。受験さえなければ道はまっすぐ続いていた。それでもふとした瞬間に、もし合格していたら、と考えることがある。兄が模試と同じ実力を発揮できていれば、上位合格も夢ではなかった。それは手に入るべき未来だった。

期待されすぎて壊れた兄と、期待されない私。両者をくらべるなら私のほうがマシだと思っていた。でもまだ気がついていないだけで、本当は私もどこかに見えない傷を負っているのかもしれない。

その兄がいきなり出てきたのだ。

目撃したのは私だった。学校から帰宅し、二階の自室へと向かっていたとき、兄の部屋のドアがゆっくりと開いた。トイレに行くつもりかもしれない。私は階段の途中で立ち止まり、身を隠しながらその様子をうかがった。鉢合わせになるのはお互いに気まずいだろうと思ったのだ。

部屋から出てきた兄が、トイレではなくこちらに向かっているのが気配で分かった。あわてて階段を引き返す。しかし一歩間に合わず、階段を下りようとした兄と目が合った。

兄はなぜか全裸だった。髪が肩まで伸びていて、まるかった顔は細長く締まっていた。下から見上げているせいか、背もかなり伸びた気がする。アルバムの写真から推測される姿とはかけ離れていた。

でもそれは兄だった。不審者ではなく兄だと確信できたのは、兄の部屋から出てきたという状況証拠だけでなく、どこかに兄の面影を残していたからだと思う。

「えっと……ひさしぶり」

無言ではいられないので声をかけると、兄は「よう」と右手を挙げた。低い声だった。唯一兄とつながっていた耳までが混乱する。兄は階段を下りてきた。一歩近づくごとに、生ごみをさらに腐らせたような臭いが鼻をついた。吐き気がこみ上げるのを何とかこらえて、階段の途中ですれ違う。長い髪はぬらりと脂ぎっていて、ごわごわしていた。

兄はしっかりとした足取りで一階へ下りていった。リビングから母の悲鳴が聞こえた。私はとりあえず自室に入り、ランドセルを置いてベッドに寝転がった。ささくれ立った気持ちを落ち着ける時間が必要だった。

兄は生きていて、こちら側の世界に戻ってきた。うれしいはずなのにうれしさがすぐ出てこない。私は本棚からお気に入りのマンガ本を取り出した。何度も読み返したページに今の気持ちを染み込ませてゆく。

部屋に閉じこもるのが〝守り〟なら、出てくるのは〝攻め〟だ。兄はきっと何かを覚悟して出てきたのだ。それが良いことなのか悪いことなのか、見きわめる必要があった。

よし、と気合いを入れて一階に下りると、兄はソファに座っていた。全裸ではなくTシャツとトランクスを着ている。シャツが小さいせいか、おへそが見え隠れしている。そのときようやく、兄が今日だけでなくずっと全裸で生きてきたのだと気がついた。思い返せば洗濯物の中に兄の服はひとつもなかった。全裸だから新しい服は必要なく、結果としてTシャツは二年ぶん小さくなったのだ。

もこもこのルームウェアを着た私と、下着だけの兄が同じ空間にいるのはちぐはぐに思えた。原始人みたいに、ずっと裸でいると寒さに慣れるのだろうか。

兄に近づくとせっけんの香りがした。シャワーを浴びたらしい。脂でべとついていた髪はさらさらヘアーになっている。こうして見ると、不健康な感じがまるでしない。腕は太くがっしりしていて、むしろ前より健康になった気がする。部屋にいる間、筋トレでもしていたのだろうか。ドア越しに聞いた物音に、そんな音がまぎれていたかもしれない。食事をちゃんと摂り、運動もしているのであれば、心配することはなさそうだった。

父はいつもより早く帰宅した。母が異変を知らせたのだろう。父は兄の姿を見て一瞬フリーズしたが、何事もなかったかのように動き出した。

ひさしぶりに家族四人で食卓を囲む。四隅にそれぞれが座ることで、ようやくテーブルがどっしりと落ち着いた。

誰かが会話を始めるのを互いに待っていた。そのまま膠着状態が続き、私は耐えきれずにテレビをつけた。お笑い芸人がドッキリを仕掛けられる番組をやっていた。今の状況もドッキリみたいなものだった。その軽い空気が不適切な気がして、いくつかザッピングしてから結局消した。静かになった食卓には、カチャカチャと箸の音だけが響く。その沈黙を切り裂くように、兄が突然口を開いた。

「アッシーを探しに行こうと思う」

皆がいっせいに箸をとめて、兄を見た。誰が反応するべきか互いに目配せし、無言の多数決をへて母が選ばれた。

「……アッシーって、何？」

家族代表として、母はしごくまっとうな質問をした。兄は「何って、ユーマだよ」と答えながらコロッケを頬張った。アッシーが苗字――たぶん芦田とか――で、ユーマが名前ということだろうか。

兄は自分のパソコンを持っていた。この二年間にも、インターネットを使って何かしていたはずだ。そこで培ったオンラインの人脈で、やっかいなトラブルに巻き込まれたのではないか。その〝アッシー〟とやらを助けるために兄は部屋から出てきたのだろうか。

私は悪い想像をもとにしたシミュレーションを繰り広げた。けれど、〝アッシー〟は私が心配するような人物ではなかった。

というより――人間ではなかった。

兄の説明によれば、アッシーとは芦ノ湖に棲むといわれる未確認生物（ＵＭＡ）のことらしい。まったく予想外の話に、私たちは口を〝ア〟の字にしたまま食卓で固まった。アッシーについて話し始めると、兄はこの二年間を語りつくすかのごとく早口になった。

兄は生き生きとしていて、実際に健康そうでもあり、ずっと心配してきたことが馬鹿らしく思えてきた。私にとっては二年間姿を見せなかった兄こそが未確認生物だった。わざわざ探しに行かずとも、ＵＭＡはここにいる。

兄はアッシーについて徹底的に調べ上げ、ひとつの仮説を立てたという。そして、その仮説を立証するために芦ノ湖を調査したいと主張した。ただの思いつきではないことはその熱量から感じ取れた。けれど、いくら身体を鍛えたとはいえ、部屋を出たばかりで遠出するのは無謀だし危険だ。両親は兄を傷つけない程度になだめすかし、時間稼ぎをする。そうやって兄の〝攻め〟は大人のやり方で吸収される。そういうストーリーを描いていた。

「いいよ」

父はあっさり承諾した。え、という言葉を寸前で呑み込む。いったいどういうつもりなのか。兄がそれを曲げて、また部屋に引っ込んでしまうのを警戒したのだろうか。

「ただし」そう言って父は兄と私を交互に見た。「行くなら麻衣を連れていくこと」

え、と今度はしっかり声が出た。兄を見ると、何だかうれしそうな顔をしている。冗談じゃない。父は「たのんだよ」と言って私の肩をぽんと叩いた。

こうして私は、半ば強制的にアッシー捜索隊の一員となった。なぜ兄がアッシーを探さなければならないのか、という根本的な疑問は置き去りにされたままだった。

翌日、私は兄の部屋に招かれた。前に入ったのはいつだったか、もう思い出せない。薄い板をはさんだだけの空間が、すぐ隣にありながらずっと遠くに感じていた。

兄の出現はつい昨日のことで、しかも見た目が大きく変わっているというのに、もう兄のいる日常に慣れつつあった。やはり引き算より足し算のほうが簡単らしい。

「おじゃまします」

警戒しつつドアを開ける。本体の臭いから察するに、居室はそれ以上だと覚悟していた。けれど、臭いは恐れていたほどではなかった。あれから少しは掃除したのだろうか。

部屋に入って目にしたのは、膨大な資料の山だった。床には大量の本が積まれ、壁じゅうに何かの印刷物が貼られている。ドア越しに聞こえたのはプリンターの音だったのか。本の背表紙には図書館のシールが貼られている。兄は部屋から出なかったはずなので、母が借りてきたものだろう。

本のタイトルはＵＭＡに関するものばかりだった。昨夜の母の様子を思い出す。兄がアッシーの話を持ち出したとき、母は初めて聞いたような顔をしていた。けれど、本を借りてきたのが母だとすれば、少なくとも兄があやしげな世界にひたっていることを認識していたはずだ。きっと父も知っている。あれは私をうまく誘導するための演技だったのか。

「散らかってるけど、座ってよ」

床には座れるスペースがほとんどない。室内をぐるりと見回すと、一か所だけまるく床が露出していた。兄は普段そこに座っているのだろうか。でも兄がずっと全裸だったことを思い出し、立ったままでいることにした。

「まず、アッシーとは何か」

手渡されたのは、Ａ４用紙で百枚以上ありそうな分厚い資料だった。これを全部読めということか。ぱらぱらとページをめくってみると、知らない漢字と意味不明な数式が出てきたので早くもうんざりした。

兄は小さく咳ばらいして、話し始めた。

「芦ノ湖の周辺ではアッシーの目撃情報が多く寄せられてる。目撃したのは釣り人、主婦、キャンプ中の親子。時間帯も場所もばらばら」

資料のそれらしき箇所を目で追いかける。かなり古い記事らしく、印刷された文字が粗くて読みにくい。

「それらの情報は大きく二つに分けられる。ネッシーのような恐竜タイプと、怪魚タイプ」

「かいぎょ？」私はいったん顔を上げた。

「とてつもなく巨大な魚ってこと。アッシーの場合、恐竜タイプである可能性はきわめて低い。その根拠は次のページ」

うまく呑み込めないまま話がどんどん進んでいく。ページをめくると、兄が書いたと思われる箇所があった。

『芦ノ湖は三千年前に火山の噴火で出来たカルデラ湖である。恐竜が生息していた中生代にはまだ湖自体が存在しておらず、したがってその子孫が生き延びたとは考えにくい』

中生代とは何年くらい前だったか。何かの図鑑で読んだような気もするが、思い出せない。少なくとも三千年よりもっと昔のことなのだろう。三千年前といえば、縄文とか弥生とかそのへんだ。

兄はオカルト的な視点ではなく、科学的根拠をもってアッシーを考察しようとしているらしい。昔から兄にはそういう傾向があった。見た目は大きく変わっても、やはり兄の根っこには兄がいるのだ。

プレッシャーに弱いのもあいかわらずだろうか。兄は百回のうち九十九回は成功するようなことでも、必ず残りの一回を引き当ててしまう癖があった。癖というより呪いに近いのかもしれない。はたから見ればわざとやっているとしか思えなかった。でも兄は真剣だった。真剣だからこそ深く傷ついたのだ。

「つまり、有力なのは怪魚タイプ。それに関しては、興味深い記事がある」

兄は、壁にでかでかと貼られた新聞記事を指さした。英語なのでほとんど読めないが、写真を見ると男性が一メートル以上ありそうな魚を抱えている。

「これはカナダで実際に発見された巨大ニジマスの写真。このニジマスは、三倍体である可能性が高い」

「さんばいたい？」また知らない単語が出てきた。

「通常の魚は父親と母親の二つの染色体だけを持つ。これが二倍体。それに対して、三倍体は三つの染色体を持つ。このとき捕獲されたのは、遺伝子操作された三倍体のニジマスが養殖場から逃げ出したものらしい」

なるほど、と私はうなずいた。すべてを理解しようとするのはあきらめた。あとで資料をじっくり読めばいい。もう一度巨大ニジマスの写真に目をやる。こんな魚を見かけたら、たしかに怪獣みたいだと思うのかもしれない。しかもこれは未確認生物ではなく、実際に捕獲された本物の魚だ。

「アッシーも、遺伝子操作されてるんじゃないかってことね」

「そう。それがぼくの仮説」

細かいことはさておき、何となく兄の言いたいことは見えてきた。でも、もし本当にそんな魚を見つけたとして、それがアッシーだったとして、何の意味があるのだろうか。

部屋に戻ろうとドアを開けたとき、背後でぽつりと声がした。

「三倍体の魚は、大人になれない」

©神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

神奈川文芸賞［2024］

現代詩部門：大賞

月餅／小沼智佳

中華街のランタンが相槌打って揺れている
故郷では薔薇のジャムを詰めるのだと
月餅を半分渡して母は言った

私は母の国、の言葉を喋れない
獅子舞が
通り過ぎた街角は
かぐや姫の黒髪が閃いて
私の故郷は誰かの異国と唄っていた
線香燻る関帝廟
国際電話の母の声
今更
臍の緒は土地と時間に絡まって
二人を繋ぐものだと知った

山下公園に掛かる頃には
解いてしまった手をぶらぶらと
ぬるい潮風に菓子屑を払って
「もう帰ろうよ」
振り向くと
秋薔薇のアーチを母はくぐった
娘のような足取りをしていた

名月と潮風と
母と私と
その晩全てがはっきりと
方向感覚を帯びて地図に載った気がした

講評　大崎清夏

半分に割られた月餅に横浜の夜空の月のイメージが重なり、宵のそぞろ歩きの景色の中に、異国にルーツをもつ母と、その異国を知らない娘との距離感が絶妙に香りたつ。山下公園の秋薔薇と薔薇ジャムの配置も見事です。

「……え？」

声の感じが違うので、私はおどろいて振り向いた。そこには兄がいた。もちろん兄はずっといたのだけれど、そこにいたのは〝二年前の〟兄だった。私は思わず息を呑んだ。

「卵をつくる栄養を自分のためだけに使う。だから三倍体の魚は好き勝手に大きくなる」

この感じを私ははっきり覚えている。中学受験が間近にせまったとき、兄は心のドアをゆっくり閉ざしていった。それ以来、兄の感情を読み取ることができなくなった。

今の兄は、あのときと同じ顔をしている。

「じゃあ土曜日に」

それだけ言い残し、兄はベッドにもぐってしまった。兄とのつながりが遮断された。私はベッドのふくらみに「おやすみ」と声をかけて部屋を出た。自室に戻り、資料をおさらいしてるとすぐに眠気がおとずれた。

私は夢を見た。兄がふたたび部屋に閉じこもってしまう夢だ。

土曜日は朝から寒かった。窓を開けると、氷を散らしたような風が吹き込んでくる。天気予報によれば夜から雪になるらしい。わざわざこんな日を選ばなくても、と愚痴を言いたくなる。兄は父から借りたダウンジャケット、私は厚手のコートを着込み、手袋や使い捨てカイロなど、できるかぎりの防寒対策をして出発した。

玄関を一歩出ると、あまりの寒さにこのままUターンしたくなった。兄の計画書によれば、今日は遊覧船に乗ってアッシーを捜索するらしい。船の上なんていかにも寒そうだ。

私はポケットからメモを取り出した。これから電車で小田原駅まで行き、登山バスに乗り換える。遊覧船の船着き場である元箱根港まで、ざっと三時間ほどかかる長旅だ。

歩き始めると、兄との距離がすぐに開いてしまった。このまま離されるとまずいので、早歩きをして食らいつく。駅に着くころには、コートの内側にたっぷり汗をかいていた。

ホームで電車を待つ間、ちらちらと兄の横顔に目をやった。こうして並んで立つと、兄の背が伸びたのがよく分かる。歩幅が違うのも無理はない。

二列に並んだ人たちが車内に吸い込まれていく。電車に乗るのはいつぶりだろう。兄を家に残して出かけるわけにはいかないので、少なくともこの二年間はどこにも旅行していない。それよりもっと前、かろうじて覚えているのは、家族四人で祖母の見舞いに行ったときのことだ。病室の白さ、消毒液の香り、痩せ細った祖母。これで最後かもしれないと思ってその姿をしっかりと目に焼きつけた。

あれから投薬治療がうまくいき、今は退院して元気に暮らしているらしい。祖母と私たちのつながりは年賀状のやり取りだけだ。ようやく自由になった私たちは、アッシーではなくまず祖母と会うべきではないだろうか。

空いていた席に座ると、当然のように兄は隣に座ってきた。中二と小六の兄妹として、ありえない距離感だ。まして私たちは二年間の隔たりの中にある。私はすばやく車内に目を走らせ、知り合いがいないことを確認した。きっと兄は、そういった繊細な感覚を部屋のどこかに置き忘れてしまったのだ。

昨夜は不安のせいでなかなか寝つけなかった。ちゃんとたどり着けるだろうか。乗り換えを間違えないか。そこに兄という不安要素がプラスされ、事態はより複雑になる。私にとってはアッシーなんて二の次で、無事に帰ることだけが重要だった。

窓の外を知らない景色が流れていく。静かすぎると不安になる。私はどうしても、沈黙を音で埋めたくなる。

「……アッシーくんって、何？」

芦ノ湖に行くことが決まったとき、父が車を出してくれることになった。車であれば迷うこともないし、乗り換えも必要ない。それなのに兄は断ってしまった。茫然とする私の耳を、〝アッシーくん〟が通りすぎていった。

「ああ、あれね」。兄は窓の外に目を向けたまま言った。「バブル時代に流行ったんだよ。車を出してくれるのはアッシーくん、ごはんをおごるのはメッシーくん」

「何それ」

父のダジャレだったらしい。どうでもいいことを気にしてしまった。バブルというのは昭和だったか平成だったか。兄はいったい何歳なのか。考えてみれば芦ノ湖のほうのアッシーも、話題になったのは昭和のことだ。

私が生まれたとき、世界にはもう兄がいた。兄がいつどこから来たのか、私は知らない。アッシーについて考えるとき、私は同時に兄のことを考えている。

兄はおとなしく座っている。髪は伸び放題だが、ぎりぎり何とか中学生に見える。兄の入れなかった中学には、合格者だけが通っている。彼らは本当に兄より賢いのだろうか。賢いことは良いことなのか。そもそも良いとか悪いとか、誰が決めるのか。

流れる景色を眺めながら、そんなことを取りとめもなく考えた。景色がめまぐるしく変わるせいか、脳内の思考もまとまることなく次々と変化していく。

「アッシーが出現するとき、目印として大きな泡が見えるらしい」

兄がふと思いついたように言った。

「泡？」

「そう。ぼくはその原因をターンオーバーだと思ってる」

ターンオーバー。その言葉には覚えがあった。リュックを開けて資料を取り出す。寝る前に少しずつ辞書で調べながら読んでいたが、結局半分も行かずに力つきた。読んだといってもただ文字を追いかけただけで、意味として理解できたところはほとんどない。

ぱらぱらとページをめくり、ちょうど読みかけていたあたりでその単語を見つけた。

『気温が低くなり湖面の水温が下がると、冷やされた水は密度が高くなって湖底に沈む。反対に、底のほうの温かい水が上がってくる。そうやって上下の水が攪拌される現象』

湖が呼吸するようなもの、と締めくくられていた。そっちのほうが分かりやすいのに、わざと回りくどく書くのはなぜだろう。

「因果関係を考えると、ターンオーバーが原因で、アッシーが浮上してくるのが結果ということになる。アッシーを見つけるには、ターンオーバーが起きる日を狙えばいい」

向こう側の席に座っている女性が、ちらちらとこちらを見ている。子ども同士で旅行しているのが珍しいのか、あるいは会話の内容が気になるのか。兄の声はよく通るので、目立つのも無理はない。

「どうして部屋から出てきたか分かる？」

「えっ」

女性に向けていた意識をあわてて引き戻す。私はその理由をずっと知りたかった。

「水温を見てたんだよ」。兄はさも当然という口ぶりで言った。「芦ノ湖で釣りをしているサークルが、湖の水温を毎日計測してる。だから彼らのデータと気象予報を合わせて、水温が低くなるタイミングを狙ってた」

「……つまり？」

「今日、ターンオーバーが起きる」

登山バスに乗り換え、五十分ほど揺られていると、突然視界がぱっと開けた。木々の向こうに水面がきらめいている。

芦ノ湖だ。

兄は窓の外を食い入るように見つめている。ようやくたどり着いた。湖は青く揺れていて、どこまで続いているか分からないほど広い。

バスを降りて船着き場まで出ると、湖のほうから強い風が吹いてきた。コートのボタンを上までしっかり留める。茶色いデッキの両側に大きな船が停泊していて、さらに向こうから別の船が近づいてくる。

遊覧船は三か所の船着き場を移動しながら湖を周遊する。私たちは船に乗りっぱなしなので、一日フリーパス券を買うことにした。チケット売り場にある料金表を見ると、中学生は大人料金、小学生は子ども料金と書かれていた。ちらりと兄の顔をうかがう。私たちの間に透明な線が引かれる。兄は気にする様子もなく大人料金を支払った。

乗船するとすぐ最上階の展望デッキに向かった。船着き場よりもさらに風が強い。イスを船べりまで寄せ、眼下に広がる湖を眺める。

「大きな泡が見えたらおしえて」

兄は反対側のデッキに座った。船の両側から探したほうが効率的ということだろう。

汽笛とともに船が動き出す。ほとんど揺れは感じない。けれど、湖面がたえず波打っているせいか、泡があちこちに浮かんでいる。探すべき泡がどれなのか見分けがつかない。

ふと視線を上げると、山の間から富士山が顔を出していた。空気が澄んでいるので輪郭までくっきりしている。おそらく私たち以外の全員が、富士山を見ていることだろう。じっと湖面ばかり眺めているより異常ということになる。

私たちは、やはり異常なきらめく湖面を、細かい泡がゆっくり流れる。下ばかり見ていると首が疲れるので、ときおり背筋を伸ばして山々に目をやった。これからは家族四人でピクニックに来ることもできるだろう。そう考えると身体の底のほうから元気が湧いてくる。

船着き場に到着すると、乗客がいっせいに出ていった。そして同じくらいの人数が入ってくる。船もそうやって呼吸しているようだ。いつの間にか兄が隣に座っていた。

「ターンオーバーが起きるんだと思う」

寒さのせいか鼻が赤くなっている。兄は痛々しいほどに真剣だ。

でも、と私は思う。もしアッシーを見つけて、〝未確認〟ではなくなったとき、兄はどうなるというのか。それが本当に、兄の二年間に意味を与えてくれるだろうか。

汽笛が鳴り、船が動き始める。兄はまた向こう側に移動した。私はその後ろ姿を見届けてから、湖面に視線を戻す。

十五分おきに船着き場を移動して、船はぐるぐると湖をめぐる。初めのうちは何周目か数えていたが、途中から分からなくなった。寒さにさらされていた耳は、痛みを通り越して何も感じなくなっている。デッキの反対側に目をやると、兄は石像のようにじっとしていた。

展望デッキで弁当を食べ、またアッシー探しに没頭する。広い湖は、たしかに何がいてもおかしくない気がする。けれど、それらしきものはどこにも見当たらない。身も心もすっかりくたびれたころ、最終便のアナウンスが流れた。太陽はもう沈みかけている。

アッシーはいなかった。

兄が費やした二年間は、この結論を導くためにあったのだろうか。三倍体の魚は子孫を残せないのだと兄は言った。五十年以上前に目撃されたアッシーが、現在まで生き延びるなんてそもそもありえないのではないか。そんなことは兄なら分かっているはずだ。

ボコッ。

水面に大きな泡が立った。その泡はぷかぷかと揺れながら漂い、やがてぱちんと消えた。バブルもこんなふうにはじけたのだろうか、とぼんやり眺める。

「あっ……」

それが何なのか、脳が反応するまでに時間がかかった。とっさに声が出ず、兄のところまで走ってジャケットの裾を引っ張った。

「どうした」

「出た。泡が」

兄は弾かれたように立ち上がると展望デッキを駆け抜け、船べりから落ちそうなほど身を乗り出した。

船が動いているので正確な場所はもう分からない。それらしき場所を指さしてみたものの、自信はなかった。

「本当に、見たんだね」

うん、とうなずく。私は水面をにらみつけ、あの泡がもう一度出てきてくれることを祈った。どうしても兄に見せたかった。

夕日を受けた湖がオレンジ色に輝いている。泡はもう出てこない。私の横で水面を見つめていた兄が、ぽつりと言った。

「……きっと、見間違いだよ」

違う。私はたしかに見た。くやしくて涙が出そうになり、上を向いて我慢してから振り向くと、兄は笑っていた。

「だって、アッシーはぼくだから」

「えっ」

兄はそこで言葉を切った。沈黙の隙間をぬって、水が船底にぶつかる音がした。兄はおだやかな表情をしている。母によく似ている、と思った。

アッシーはぼくだから。兄の言葉を繰り返す。たしかに、兄はずっと〝未確認生物〟みたいなものだった。

二年前の兄と、今の兄とが重なっていく。大人になれない魚、という言葉を思い出す。

「じゃあ、発見者は私だね」

わざと明るい声で言うと、兄はまた笑った。兄の笑顔がにじんでいく。私たちはこの瞬間、たしかに呼吸している。

父の采配は正しかった。兄を発見するのは私の役目だった。二年間も部屋の中を泳ぎ続けた兄は、ようやく水面に顔を出す。その長い時間も、芦ノ湖も、すべてが必要なことだった。私が発見することで、兄はアッシーとなり、同時にアッシーではなくなる。

「髪……切ったほうがいいよ」

何となく顔を見るのが恥ずかしくて、湖面に目を向けたまま言った。私たちと同じく、湖も呼吸している。その攪拌にまぎれて、本物のアッシーが泳いでいるのかもしれない。

沈みかけた太陽が、二人の世界を赤く染めていく。長い一日が終わる。「帰ろうか」と兄が言った。

講評　柚木麻子

二年間引きこもりだった兄がいきなり全裸で部屋を出てきてから、私も麻衣同様に兄から目を離せず、ずっと引き込まれたまま、最後の行まで連れて行かれた形です。読者全員がアッシーの「発見者」となっていく構成、素晴らしいです。自宅から芦ノ湖までの道のりの間、麻衣の思考が移り変わり、自然とこの家族の歴史がわかる描写も見事でした。気温ばかりではなく、誰も直接触っていないはずの芦ノ湖の水温まで伝わってきます。また、何度だって発見して貰えばいいし、発見してあげればいいというメッセージは、いま自分という存在にはかないものを感じているすべての読者に、届いて欲しいと思いました。大賞、おめでとうございます。